

氏名	大竹 由夏		
学位の種類	博士 (デザイン学)		
学位記番号	博甲第 7834 号		
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	漫画の場景と実際の眺望に基づく東京タワーの 景観の保全・活用に関する提案		
主査	筑波大学教授	博士 (デザイン学)	五十嵐 浩也
副査	筑波大学教授		笹本 純
副査	筑波大学教授	博士 (工学)	花里 俊廣
副査	筑波大学准教授	博士 (工学)	山本 早里
副査	九州大学准教授	工学博士	大井 尚行

論文の内容の要旨

(目的)

筆者は、東京タワーを、近代的な都市「東京」の原点となる建造物であるとする。中でもそれを含んだ周辺の高層化した都市環境とともに不断に変貌を遂げつつある眺望景観は、東京の魅力を伝えるものであると考え、独自の特徴をもつ眺望景観を保全・活用するための手段を講じなければならないとし、そのための施策を提案する。

また筆者は、景観を考える上においては、実際の眺望と同様に、メディアに表現された場景も重要であると捉える。これらの場景は読者・視聴者間においてイメージの共有がはかれるものと考え、特に、漫画は日本の出版販売数の三分の一を占めるほど大衆文化として根付いており、学術的にも関心が高まりつつあり、漫画の場景を考察の範囲に加えることとしている。

以上のような背景説明ののち、本研究ではその目的を、東京タワーの眺望景観の保全・活用するための景観施策を提案することとする。そのために、既存の眺望景観の保全方法を整理し、日本の大衆文化である漫画に描かれた東京タワーの場景からその魅力を明らかにした上で、現地調査を行い東京タワーの眺望景観を把握し、8つの代表的な眺望景観を目標景観像と定め、同様に望み得る重要眺望点を選定し、保全すべき眺望景観誘導範囲、眺望景観形成を設定することによって、それぞれの眺望景観を活

用する具体的な提案を行う。

本研究は、序章と 1 章から 6 章、及び終章によって構成される。

(対象と方法)

序章では、日本の都市における眺望景観の保全にをめぐる社会的背景と、東京タワーの眺望景観を保全する意義について述べ、また、既往の研究成果と漫画の特徴について、さらに、漫画に描かれた場景を東京タワーの眺望景観の魅力をつまやかにする手段とする意義について述べた。

1 章では、既存の眺望景観保全の取り組みに関する研究を説明した。2 章から 6 章での調査事項について、より具体的には、眺望主対象、目標景観像、重要眺望点、眺望景観誘導範囲をそれぞれ説明し、眺望景観形成の概念を導くとともに、東京タワーの眺望景観の保全における眺望主対象としての魅力をつまやかにし、具体的に目標景観像を定める必要があるとした。

(結果)

筆者の研究の結果は、主に、2 章から 4 章にかけて述べられている。

2 章では、漫画に描かれた東京タワーのイメージを考察した。東京タワーが完成した 1958 年以降の漫画作品を探索し、1982 年から 2010 年までについて 23 作品 333 コマを収集した。これらでは、東京タワーは、東京、日本、社会的象徴、命、希望、孤独を象徴するものと表現され、また、見上げるものからつますすぐ見るもの、見下ろすものへと変化していることが特徴とされた。とくに、2000 年以降の作品には、見下ろすものが多くなり東京タワー周辺が高層化した現実が漫画にも反映されていることを指摘する。このように、東京タワーの眺望点、タワー足下、街路、公園、寺、海岸、料亭、船上の地上レベル、電車内、高速道路上の「高架レベル」、または、空中、屋上、マンション、ホテル、オフィス、病院、レストランの「高層レベル」であることが多く、これらのほとんどで大展望台が描かれていたとする。さらに、東京タワーの眺望景観は、足下景、公園景、寺社景、街路景、高速道路景、電車景、水辺景、上空景の 8 つに分けられるとし、以上から、東京タワーの魅力を活かすためには複数の重要眺望点を設定し眺望景観を保全する必要があると指摘するとともに、8 つの眺望景観の種類が、保全すべき東京タワーの目標景観像となると仮定し、議論を進める。

3 章では、東京タワーであると認知できる見え方について調査し、東京タワーの重要眺望点となり得る地点について論じている。250 人にインタビューを行い、東京タワーと認知できるには、大展望台までが見えることが重要であると指摘した。また、東京タワーが見える領域を「可視域」、見えない領域を「不可視域」と定義し、さらに、可視域のうち、大展望台が見える領域を「認知レベル 1」、大展望台が見えない領域を「認知レベル 2」とした。

4 章では、東京タワーの重要眺望点となり得る、良好な東京タワーの眺望景観を得られる地点を現地調査に基づきまとめた。対象地点は、1 章の既存の眺望景観保全の取り組みにおける重要眺望点と、2 章の漫画に描かれた東京タワーの眺望点に基づき決定した。また、東京タワーの重要眺望点となり得る地点とは、つまり、良好な東京タワーの眺望景観を得られる地点であるとし、東京タワーの大展望台が見える地点である認知レベル 1 と判断される範囲を、具体的に、「タワー正面」「周辺街路」「芝公園」「増上寺」「東京湾岸・隅田川岸」「首都高速道路」「JR 山手線」「展望台」として選び、さらに、それらについて認知レベル 1 となる範囲をつまかにした。

(考察)

また、5 章及び 6 章では上記の結果を踏まえた考察が提案としてまとめられている。

5章では、8種類の眺望景観を目標景観像と定め、同様に、望見できる重要眺望点を10箇所選定するとともに、これらを地図上に示し、地名と経度緯度で表記し、保全するための眺望景観誘導範囲をまとめ、東京タワーの眺望景観保全マップを作成し、眺望景観形成を設定した。

6章では、8種類の眺望景観を活用する具体的な提案を、「アクセスルート」、「車窓景・乗船景」、「新規展望施設」として挙げた。「アクセスルート」とは、足下景、公園景、寺社景、街路景を活用する提案であり、良好な東京タワーの眺望景観が得られる地点、とくに重要眺望点の5つを通る駅から東京タワーまでのアクセスを明示したものである。「車窓景・乗船景」とは、街路景、高速道路景、電車景、水辺景を活用する提案であり、アナウンス等で乗物からの東京タワーの望見を宣伝し、東京タワーを意識させることを挙げたものである。さらに、「新規展望施設」の提案とは、水辺景、上空景を活用するものであり、東京タワーの眺望を阻害する建造物の建設を禁止する厳しい施策ではなく、新たに公共的な展望施設をつくるなど柔軟な施策として挙げたものである。これらをまとめ、東京タワーの眺望景観活用マップを作成した。

終章では、本研究を総括し、今後の展望を述べた。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、既存の眺望景観の保全方法を整理し、漫画のイメージから東京タワーの眺望景観の魅力を明らかにし、インタビューや現地調査を通して、良好な東京タワーの眺望景観が得られる地点を明らかにしている。さらに、これらの考察に基づいた8つの眺望景観を目標景観像として東京タワーの眺望景観として保全するための提案を行っている。このように漫画のイメージから東京タワーの眺望景観の魅力を明らかにしており、その着眼点は新しく、保全マップと活用マップを作成している点で景観に関して具体的な視点を持つ研究であり、さらに、積極的にその研究成果を社会的に還元するための提案でもあるなど、博士（デザイン学）の学位にふさわしい研究であるとの高い評価を得た。今後、本研究の成果を関係機関に周知するなど、導いた提案を実現する過程を通して、東京タワーの眺望景観を保全する取り組みが社会的広がりを見せることを期待したい。

平成28年1月20日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。